

東京の教育

復刊第二十五号 東京都教師会発行

(事務局) 横浜市都筑区茅ヶ崎南四ノ十四ノ一ノ三〇

占領政策としての祝日名称変更

勤労感謝の日

先 田 賢紀智

本紙の読者の皆様には「釈迦に説法」ではあるが私の勉強のために整理してみたい。

大東亜戦争以前は白人が世界を支配してきた。それに真つ向から勝負を挑んだのが日本。米英は見下してきた有色人種代表の日本に初戦で負けた。フィリピンでわが世の春を謳歌していたマッカーサーは日本軍の急襲に部下を捨て敵前逃亡。この時の恨みを戦後様々な形で晴らしていく。日本の強さを知ったアメリカは「禁じ手」(戦争犯罪)を繰り出し勝利した。東京大空襲では一晩で十万人もの女子供を焼き殺した。ヒロシマ、ナガサキへの原爆投下は紛れもない戦争犯罪である。

しかし「勝てば官軍」が歴史の常。戦中は武力で禁じ手を用い、戦後は洗脳という禁じ手を連発する。白中堂々とした禁じ手が「極東国際軍事裁判」という名の茶番劇。自らの正統性を主張し、日本の極悪性を日本人に叩き込んだ。この裁判が茶番であることは次のことから明白である。つまり裁判長が豪州人、十一名の裁判官、検事が全て勝者側の卑近な喩を用いれば、「ヤクザの出入り」の

裁定を勝った側の親分が下す様なものである。

しかし日本人は見事に引つ掛った。この「白人は正しい。日本人は悪い」、所謂自虐史観は令和の御世でも消え去らない。「白人は正しい。日本も見倣おう」とした「おべんちやら」が多い。子供部屋をキッズルーム(傷でもあるのかしらん)、警報をアラート(アラートと驚く駄洒落かしらん)。ここまでは笑って過ごせるが、体育の日(昭和三十九年のアジア初の五輪開催を記念した祝日)を「スポーツの日」に言い換えたのには怒りが込められる。マッカーサーは泉下で高笑いしていることであろう。

東京裁判という白昼堂々の茶番劇の裏でアメリカさんは巧妙な禁じ手を弄する。ここではその代表例を見てみよう。それは祝日の言い換えである。戦前の祝日は「四大節」、四方拝(一月一日)、紀元節(二月十一日)、天長節(四月二十九日、昭和天皇の御誕生日)、明治節(十一月三日、明治天皇の御誕生日)に代表される皇室関連日。

研究熱心なアメリカさんは「日本人の強さの秘訣は皇室にあり」と見抜いた。そして皇室解体を模索した。しかし天照大御神、神武天皇から式千六百年。現人神の天皇を死刑にしたら日本国中に反乱が起こる。そこで考え

た。名前を変えよう。

紀元節を建国記念の日に改名。春季皇霊祭を春分の日に。秋季皇霊祭を秋分の日に。明治節を文化の日に。新嘗祭を勤労感謝の日に。これが見事に成功した。

釈迦に説法だが紀元節は神武天皇御即位の日、この年を皇紀元年とした。これを建国記念の日に改名。「建国をしのび、国を愛する心を養う」らしいが、誰が建国したかが消されている。

春季皇霊祭(秋季皇霊祭も同様)は春分(秋分)の日に皇霊殿で歴代の天皇・皇后・后妃・皇親の霊を祭る儀式。これを春分の日に改名。春は「春分の日にあたり自然を讃え、生物を慈しむ日」。秋は「祖先を敬い、亡くなった人々をしのぶ日」らしいが、祖先が何方かは分らない。日本人の心の祖先は建国以来皇室である。

明治節は明治天皇の御誕生日。激動の時代、明治維新、日清・日露戦役を乗り越え昭和に辿り着いた。国難を乗り越える心の支えとして明治天皇を戴いたのであるが、これを「文化の日」に改名。「自由と平和を愛し、文化を進める日」らしい。ここでも日本人の気力を挫く陰謀が炸裂。この日は大切な祝日だがそれを狙って、アメリカ人が英語で書いたものを日本語に訳して新憲法と称して公布。これを記念して「自由と平和を愛する」「文化の日」と定めた。見事なお手並みであ

る。

最後に新嘗祭は稲の収穫を祝い、翌年の豊稔を祈念する祭儀。天皇が新穀を天神、地祇に供え、その恩恵を謝し、御自らも食する宮中祭祀であるが、これを「勤労感謝の日」に改名。アメリカやカナダには十一月に Thanksgiving Day (感謝日) がある。誰が誰に感謝するのか。これには諸説あるがその一つ。欧州から渡ってきたイギリス人たちが原住民に感謝したという説。冬目前、飢え死に寸前のイギリス人に原住民が手を差し伸べたというのであるが今では七面鳥の受難日。いずれにしろ皇室には無関係、アメリカ人に都合の良い日に架け替えたのである。

(会員)

ある父兄との会話―忠臣蔵異聞―

黒羽秀夫

卒業生のS君が久しぶりに来校した。そこで近況をききながら話題を、彼の好きな歌舞伎の話へとスライドさせた。丁度私は十月三十日(令和四年)、NHKのEテレで故中村吉右衛門の一周忌追善の番組(忠臣蔵外伝の松浦の太鼓等)を観たところだったので、そのことについて訊いてみた。彼も又同じ番組を祖父と共に観たという。彼の歌舞伎好きは祖父の影響の賜物であることがわかり、早速ある小説の「元禄赤穂事件」に関する逸話を説明して、その本のことを彼に伝えておいた。そうしたらつい先日、彼から連絡があり、

この本の件で近日中に、何と祖父に会ってほしいとの要請であった。そこで祖父の方と三人で会い、「忠臣蔵異聞」に関する話をする事になったのである。祖父の方は私が彼に指定した本を読了し、その内容がとてもフィクションだとは思えず、私に会って更に話をしたくなったという。(私はこの本の同じ作者の関連本を購入し祖父の方へ寄贈することにした)。

祖父の方にかの本のどこに注目したのかと訊くと、持参した本のある頁を示した。

「……『討入りの時、赤穂浪士たちは凝った身なりだったそうだな。皆、黒小袖を着て下着は浅黄の羽二重で緋縮緬の帯を締め、小袖も茶裏や紅裏のもの、茶色や浅黄の裏つきタツキ袴、染紺色の足袋をはき、真田紐や緋縮緬をたすきにして小袖の両袖、兜頭巾に目印として白い布をつけていたそうです。雪の夜、黒小袖に白い布をつけた赤穂浪人達の姿は、さぞ映えましたやろ』
甚伍がそこまで言うのと深雀は膝をたたいた。

『黒と白の対比や、そら兄貴の好みやな』
『羽倉様が言わはった通り、赤穂浪士の討入り装束は光琳好みや。光琳はんの絵筆が雪の日の討入りを描いたのかもしれない。……』

そこで私はこの本の末尾の解説にあるこの作品(二〇〇五年、本書は第二九回歴史文学賞

を受賞)の選評者のひとり、作家津本陽氏の評、「銀座役人中村内蔵助との縁で大石内蔵助ら四十七士の討入り衣裳は、光琳が黒と白の対比で際立たせてつくったものであるという推測は、興味深い。」を示して、この作者の筆力を味わって下さいと返答した。すると祖父の方はもうひとつの箇所を指した。

「……吉良が指導する接待役の大名に、他の高家から間違った儀礼をひそかに教えさせようというのだ。吉良は傲岸な老人で、大名への指導もおろそかだった。親切顔をした高家が、「ひそかに間違ったことを教えれば大名は喜んで従うだろう。吉良は間違いに気づいて大名を手厳しく叱るに違いない。そのとき、この高家は、吉良が賄賂が少なくないことに腹を立てて意地悪をしていると囁くのだ。まわりの者が同情するふりをすると『いじめ』を受けた者の怒りは倍加する。大名は、しだいに吉良への憎悪を募らせ、吉良も大名に苛立っていくことになる。大名と吉良との間で喧嘩沙汰が起きれば式典そのものが壊れるだろう。……吉良上野介は一月に幕府の新年祝賀使として京に上っていた。しかも勅使接待の指導役も務めた。吉良が京から戻るまでの間、浅野内匠頭は指導もなく準備を進めなければならなかった。御台所派に操られた高家がつけこむ隙は十分にあったのだ。……」

この様な指定した箇所は、まだいくつかありましたが、時間もオーバーしたので散会と

なりました。

要は年末になると昔は「年末らしい風物詩」として忠臣蔵をみることでできたのに、何故か最近みられないのがさびしいです。」誠に別れの祖父の方のこの一言が響きました。

そこで私は授業の工夫として逸話を挿入して、それこそ「年の瀬や水のながれと人の身は」(註①)と、きたら「あした待たるるその宝船」(註②)と、返句した私たちの祖先の心情を伝えられる様に心掛けてまいります。

尚引用した文は作者と作品名は、葉室麟「乾山晩愁」(角川文庫二〇〇八年刊)。また寄贈した本(同じ作者)は「花や散るらん」(文春文庫二〇二二年刊)。因みに関連本(同じ作者)をもう一冊「はだれ雪」上・下(角川文庫二〇一八年刊)があります。

(註)

①と②は共に左記の記述に関連する。

「討入りの前日十一月十三日、両国橋の橋詰で、其角は笹売り姿の源五とばったり出会った。

一年の瀬や水の流れと人の身は

と其角は詠んだ。これに対して源五はすぐ

に、

「あした待たるるその宝船

と大望を待つ身であることをひそかに伝えたとこの話が広まった。」(「乾山晩愁」の中の短編「二蝶幻景」より。)

其角とは俳人の宝井其角、源五は赤穂浪士の一人、大高源五のこと。また歌舞伎の「忠臣蔵外伝 松浦の太鼓」でも、この場面はとても人気が高い。

尚去る十二月七日、祖父の方が七十八歳で逝去されました。慎んでご冥福をお祈りいたします。(会員)

戦前の中学国語の教科書を読む(十九)

「次の文章は、八波則吉編『現代国語讀本 卷六』(昭和十年修正七版・現在の中・学三年後期相当)所収のものである。漢字は当時の正字、送り仮名は現在と違ふところが多いが原文通りとした。読み仮名は、適宜新たに加へた。紙面の都合で二回に分けて掲載した。」

先驅者(下)

水上瀧太郎

(承前)

紅葉先生の偉さは解つてゐても、鷗外先生の偉さはあまり解らなかつた。何かの折に、兄が紙片に書いた小説家番附といふものを見ると、鷗外先生が横綱が張出大關かになつてゐたので、そんなに偉いのかと驚いて、先生



森 鷗 外

の作品を繰返して讀んだけれども、やはり解らなかつたことを覚えてゐる。まだ小學校時

代のことだつた。

今考へても、その時の歡喜がまざぐざと蘇つて、胸が躍つて、涙をさへ催しかねないのは、「即興詩人」を讀んだ時のことである。

その時は既に中學に入つてゐた。折々讀めぬ字はあつたが、曾て一度も見たことのない清新な文體を幾度朗誦したか解らぬ。好きな箇所は諳記した。恐らくは、自分達と時代を同じうする詩人・小説家、その他文藝の愛好者で、曾て「即興詩人」を讀んだことのない人は極めて稀で、また一度でもこれを讀んだ人は、その若かつた日を追憶して、歡喜の波を胸に打たせぬものはなからう。

「即興詩人」の翻譯は原作以上と稱せられてゐる。論を好むものは「翻譯は原作をあるがままに傳へるべきで、原作以上と言はれる翻譯は、忠實な翻譯でもなく、名翻譯でもない。」と言ふだらう。現にそんなことを利口ぶつて言つたものもあつた。そんなことを言ふものには勝手に言はせておかう。自分達は、原作の内容を盛るのに、更に適切な文體を以てせられた鷗外先生の一事業として、また自分達の文學的生涯に於て比類のない歡喜に打たれた好記念として、永久に「即興詩人」を讚美しよう。

ハルトマンの審美學説を紹介して、洒落と機智と漫罵との外には批評の言辭を知らなかつた人々に、嚴正な批評の根據を知らせた先生は、一方に於ては、自ら新體の創作を發表し、世界各國の小説・戯曲・詩歌を翻譯し

て、文學の模範を示された。「水沫集」・「つき草」・「かげ草」などは、いづれも文學に志すものに深い感動を與へ、また彼等の行くべき道を指示した偉大な記念塔である。

今更茲に先生の自分達に残された功績を事細かに述べる必要はないが、もう一度、今日の文學は先生に育てられたものであるといふことを繰返して言っておく。若し明治文學史から先生の存在を完全に消すことが出来るなら、その文學史の殆ど全部が書直されねばならぬ。即ち今日の創作・評論の形式は、よほど現在のそれと違つたものとなつてゐるだらう。違ふといふよりも、發達の初期をさまざまのといつた方が適切かも知れぬ。それにも係らず、世間は先生に對して、眞情を籠めて感謝の意を表したらうか。先生の著作が専門家に與へた偉大な影響に引換へて、一般受けのしなかつたことを以てすれば、否と答へる方が適當である。文壇の人々さへ先生に追隨することはむづかしかつた。まして所謂民衆は先生を理解し味得ることが出来なかつた。これやがて先驅者の免れることの出来ぬ運命だつた。

(原注)

即興詩人 原作はデンマルクの童話作家アン

デルセン (1805-1875)

ハルトマン ドイツの哲學者 (1821-1906)

□短信寸評□

我が国の鉄道開業百五十年が話題になつて

ゐる。しかし実際には百年を過ぎた頃が国鉄私鉄共に最盛期で、国鉄はその後一部の労働組合の過激な行動や赤字経営などの果てに、自滅した。以来、国内の鉄道は衰頹しつつある。

その主なものは、地方交通(所謂「ローカル線」)の廃止である。赤字であることを理由に、安易に路線を削減してきた。辛うじて生き残つてゐる区間も利用者は中高生か車を使へない高齢者や通院患者ばかりといふ。悪循環に陥つてしまつてゐる。しかしこれを裏返へしてみると、さうした交通弱者の最後の砦となつてゐるといふことだ。

さて、ここには地方切り捨ての構造が見えてゐる。「ローカル線」の衰亡はその一例に過ぎない。東京への一極集中や、大都市への人口偏在など、過疎地域増加の深刻な状況は続いてゐる。

地方が疲弊してゆく今日、例へば、民間の営利企業が全国展開する大型複合商業施設の跋扈により、近隣の地元駅前商店街はシャッター通りになつてゐることに歯止めを掛けられないことや、議員定数の一票の較差に拘つた連中が声高に言ひ立ててマスコミがその提灯持ちをしてゐるうちは、この問題からは逃れられないであらう。

事の本質や大局を見通せない大衆が跳梁し政治家がそれに迎合してゐるやうでは、我が国内の均衡を保つことは困難な状況と言はざるを得ない。

(ふ)

日本教師会研究大会について

武漢ウィルス病の蔓延により中止されていた日本教師会研究大会は、今年八月三年ぶりに開催することができた。

来年度は「創立六十周年記念」として第六十一回教育研究大会を、岐阜県教育懇話会的主管で、令和五年八月五日(土) 六日(日)の二日間に亘つて岐阜市内で開催される予定になつてゐる。

お願い

一、会費納入

年額二千元

口座 「みずほ銀行」 港北ニュータウン支店
店番号 743 普通預金 1330150

名義 佐藤健二

二、原稿募集

「東京の教育」への会員の皆様のご投稿をお待ちしています。

字数は三千字程度以内でお願いします。ただしこれより長いものは数次に分けて掲載することもできます。

仮名遣いは古典現代いづれかに統一して下さい。また、写真や図版についてはご相談ください。

送り先は題字下にあります。また、メールの送り先は次の通りです。

事務局アドレス(佐藤)

komasato@juno.ocn.ne.jp